

ドッジ・ライン下の日産

自動車の人員整理

レッドパーズとピンクパーズ

香川大学経済学部 吉田 誠

報告者の問題関心

- ❖ 戦後初期における企業内秩序の形成過程
- ❖ 企業社会的秩序（1960年代～1990年代半ば）の形成プロセスの前提になったことの考察

企業社会的秩序の機制：競争と排除

- ❖ 競争
 - 能力主義的人事管理
 - ❖ 企業特殊熟練「知的熟練」（小池和男）
 - ❖ 「生活態度としての能力」（熊沢誠）

排除

- ❖ 能力主義管理にとって障害となる人員層
 - ❖ 左翼組合活動家
 - ❖ 女性
 - 「性と信条に対する差別」（遠藤公嗣）

研究対象

- ❖ 1945～1956年頃の日産自動車の労使関係
 - ❖ 1953年日産争議
 - 組合分裂、全自崩壊、第一組合解散
- 総評最左派の組合→労使協調型の組合
企業社会的秩序の形成の前提条件

研究のためのデータ・資料

- ❖ 当事者へのインタビュー：特に「例の会」参加者（第一組合関係者の集い。2ヶ月に1回、横浜にておこなわれる懇談会）
- ❖ 浜賀コレクション：第一組合関係者浜賀知彦氏収集資料→未発見資料多
- ❖ その他、東大社研文書、プランゲ文庫等

本報告の仮説

- ❖ 自動車組立メーカーの作業工程からの女性が排除されることになったのは、ドッジ・ライン時の人員削減においてである

自動車組立メーカーの労働過程

- ❖ 生産現場は「男性職場」（野村正實 1993）
 - ライン労働の特質を規定
 - =高密度・単調労働、長時間労働（QC等も含む）を可能にした条件

暗黙の仮定

- ❖ 女性労働者を動員した戦時体制
- ❖ 終戦直後、多くの企業で全員解雇
 - 必要人員を再雇用
- ❖ 女性労働者の排除＝男性職場化はこの時期だという仮定

暗黙の仮定への疑問

- ⇒ 2003年4月に開催したシンポジウム
「全自・日産53年争議：半世紀後の総括と課題」
で、放映された1本のビデオ

日産自動車の動向

- ⇒ 1945年9月30日 全従業員約9000人を解雇
- ⇒ 1945年10月1日 約3000人を再採用
- ⇒ 以後、積極的な採用を続け1949年の人員整理までには8671名

当時の採用の状況

- ⇒ 「三分の一再採用の直後から、どんどん新規採用、中途採用をやり出したんです。と、いうのは再採用者の中から食糧事情や食ってはいけないということで辞めて闇屋になったりする人がいて、それを補充するために採用せざるを得ない、ところが、その連中が辞めていく...と毎月、どれだけ採用し、どれだけ辞めたかはわかりませんが、とにかくひどい状態でした。」（中村秀弥：日産労連, 1992, p.107）



この混乱のなかで女性や共産党の活動家も採用

人員整理1年前の支部別組合員分布

	男	女	計
横浜	3355	470	3825
吉原	1703	221	1924
厚木	533	79	612
つるみ	734	75	809
戸塚	268	26	294
柏尾	112	11	123
船堀	221	15	236
砂町	165	23	188
大阪	97	19	116
計	7188	938	8127

出所：日産重工労働組合『日産旗旬報』62号（1948年11月21日）

女性の状況

- ⇒ 全組合員中1割強が女性
- ⇒ 女性の職場（組合元婦人部長の証言）
 - ⇒ 事務：工賃、庶務、タイピスト、電話交換手など
 - ⇒ 現場：検査、鑄造工程（中子）、工具製作など

ドッジライン以前の人員体制

- ⇒ 戦後の混乱の中で総動員的な体制が継続
(性別職務分離については認められるが。。。)
- ⇒ 戦時中の業務体験者が呼び戻されるということがあったとも推察できる。

ex. 大竹綾子（日産）、中本ミヨ（プリンス）など

1949年10月の人員整理基準

次の各号に該当するものの中から選定する。但し、会社の必要と認めるものは除外する。

1. 停年に達したものと及び本年中に停年に達するもの
2. 勤務成績不良のもの
イ 処罰を受けたことのあるもの
ロ 欠勤多きもの
ハ 長期欠勤者
ニ 其他勤務振不良のもの
3. 配置転換困難なもの
4. 勤続年数浅きもの
5. 休職者
6. 遠距離通勤者
7. 扶養者なきもの
8. 其他全般的にみて経営に寄与する程度の低きもの

1949年10月の再建案による人員整理数

	在籍者数	残留要員数	依頼退職者数	解雇通知者数	解雇取消者数	実際整理人員	実際残留人員
本社	1015	685	0	330	0	330	685
検査部	274	206	0	68	0	68	206
設計部	118	103	0	15	0	15	103
研究部	77	66	0	11	0	11	66
休職	78	17	5	56	0	56	17
(小計)	1562	1077	5	480	0	480	1077
工場	3146	2535	10	601	15	586	2550
計	4708	3612	15	1081	15	1066	3627
吉原工場	1952	1632	6	314	0	314	1632
外車工場	351	316	3	32	0	32	316
厚木工場	611	429	0	182	0	182	429
戸塚工場	303	217	2	84	0	84	217
大阪工場	127	104	1	22	0	22	104
柏尾工場	116	95	0	21	0	21	95
船堀工場	254	226	6	22	0	22	226
砂町工場	200	176	0	24	0	24	176
分工場休職	49	5	0	44	0	44	5
合計	8671	6812	33	1826*	15	1811	6827

* 1826名中には嘱託への転換者88名をふくむ

証言の中での女性削減

- ⇒ 「女性の現業員ちゆうのはね、一人も残らなかった。全員職首。事務技術系の女性職員はね、残ったけど。横浜工場ではね、現業の女性職員で残った人は一人もいないですよ。」（金津健三）
- ⇒ 「人のところはわからないけど、当時私は購買にいたんだけど、購買部なんかは各課に補助的な仕事をしている人（女性）がいるわけ。各課に一人位いた。それが二人位残して全部やられた」（飯島光孝）
- ⇒ 「私の部などは若い人をみんな首にしてしまった。それと女の子...だから皮肉なことに男の子のような名前の女性は残ったりして」（吉田忠寿：日産労連 1992b, p.115）
- ⇒ 「私の職場は女の子が多く、そのほとんどが対象になりました。」（斉藤吉也：日産労連 1992b, p.115）

人員整理1年後の従業員数の分布

	事務員		技術員		現業員		特務員		合計		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
本社及本社工場	562	111	319	2	2530	46	137	81	3548	240	3788
吉原工場	206	62	120	0	1065	23	52	26	1443	111	1554
厚木工場	43	16	19	0	287	10	12	5	361	31	392
柏尾工場	10	2	5	0	66	0	5	1	86	3	89
大阪工場	14	2	7	0	64	4	2	2	87	8	95
外車工場	53	13	14	0	202	0	1	11	270	24	294
東京製鋼所	34	9	26	0	275	7	19	5	354	21	375
計	922	215	510	2	4489	90	228	131	6149	438	6587

出所：日産（1951、22頁）

※同資料には組合員数6456名との記述もある。

1948年と1950年との人員変化

- ❖ 実数（組合員ベース）
男性：7188人→6018人（= 6587人 - 非組合員数）（14%減）
女性：938人→438人（54%減）
- ❖ 構成比
男性：88.4%→93.2%
女性：12.6%→6.8%
- ❖ 「日産の婦人はおとなしいと定評されていたが婦人部だけに六割に上る首切り通告を出されてはだまつてひっこんでいられない。」（近藤、1949）とも整合的。

女性削減の結果から見えること

- ❖ 「動力では巻線の子を全員首にしたので、モーターの修理も不可能な状態」（日産旗旬報 92号 1949.10.21）
→生産活動の維持を無視
 - ❖ 「庶務課では現場のほとんどだ、子供三人を抱えた戦争未亡人Mさん、病弱の老人を抱えたIさん『理由をきかして貰いたい』沈黙の部長。
組合長は『何故女の人ばかり首を切るのですか』とつめよつた」（日産旗旬報 93号 1949.11.1）
→人員整理基準「扶養者なきもの」の規定を無視
- ※いずれも性が重要な整理対象者の決定基準であったことの傍証となろう。

女性が狙われた理由

- ❖ 生産体制の整備・合理化との労基法の女性保護規定との齟齬
 1. 休日出勤の調整
 2. 交替制の導入など勤務体制の見直し
 3. 生理休暇
など

補：トヨタの場合

- ❖ 1950年のトヨタの人員整理（辻、2008）
「女性作業員に大きなしわ寄せ」
男性：33%の減
女性：71%の減（争議終結後の自主退職者も含む）
- ❖ 1957年 既婚女性の退職
「従業員から子女の採用を強く希望されているが、限られた人員のなかで、希望を満たすことは不可能である。また、勤務と家事の両立は困難だと思われるので、後進に途を譲ってほしい」（トヨタ労組、1966、p.86）

トヨタの女性作業員数の推移

1946.1	1948.8	1950.5	1959.9
340人 (11.8%)	689人 (13.7%)	392人 (9.5%)	127人 (3.5%)

カッコ内は全作業員数に占める割合
(日本文科学会、1963、p.98より作成)

結語

- ❖ ドッジ・ライン下の人員整理
戦後の混乱のなかで自生的に形成されてきた人員体制のリセット
→女性と左翼活動家の排除

男性作業員を中心とした生産体制への転轍